



医療法人 欣助会 吉祥寺病院  
理事長・院長  
塚本 一

# 懐中時計

(シュオブ・フレイレル・ラ・シヨール・ド・フォン社)

## 戦中戦時から時を刻む 父の形見の懐中時計



今でもねじを巻けば稼働し、  
澄んだ鐘の音が時刻を知らせる

この懐中時計は、大学4年生の時に急死した父の形見としてもらい受けました。

時代は第二次世界大戦後、軍医としての従軍を終えて九州で外科医をしていた父が、ある裕福な家庭の息子さんを助けた時に、そのお礼として贈られたものだとも聞いています。おそらく、1800年代にスイスでつくられたもので、時刻を鐘の音で知らせるミニッツリピーターという機能が付いています。

当時の貨幣価値からすれば相当高価なものだったと思います。というのも、その人が自分の田畑を売り払って得た財産で、ようやく手に入れたものだったとか。宝物だったに違いないこの時計を、惜しげもなく若かった父に贈ったのです。この事実から当時、医療がどれだけ貴重だったかわかります。当時の医師は今の時代以上に「人の命を預かる」という重みを背負っていたといえるかもしれません。

もともとこの時計には表と裏に金のふたが付いていたようですが、父がもらった時にはすでにふたはなかったといえます。戦時中、この時計の金のふたは国に供出されたとのことでした。そこで父は、この時計に合う大きさの簡易ケースを買ってきて、それに入れて大切に保管していました。

父からこの時計の話聞いた時、第二次世界大戦時の日本の様子が浮かび、時代の重みを感じたことを覚えています。私もまたこの時計を、父と語り合った思い出とともに次の世代へ引き継いでいきたいと思っています。